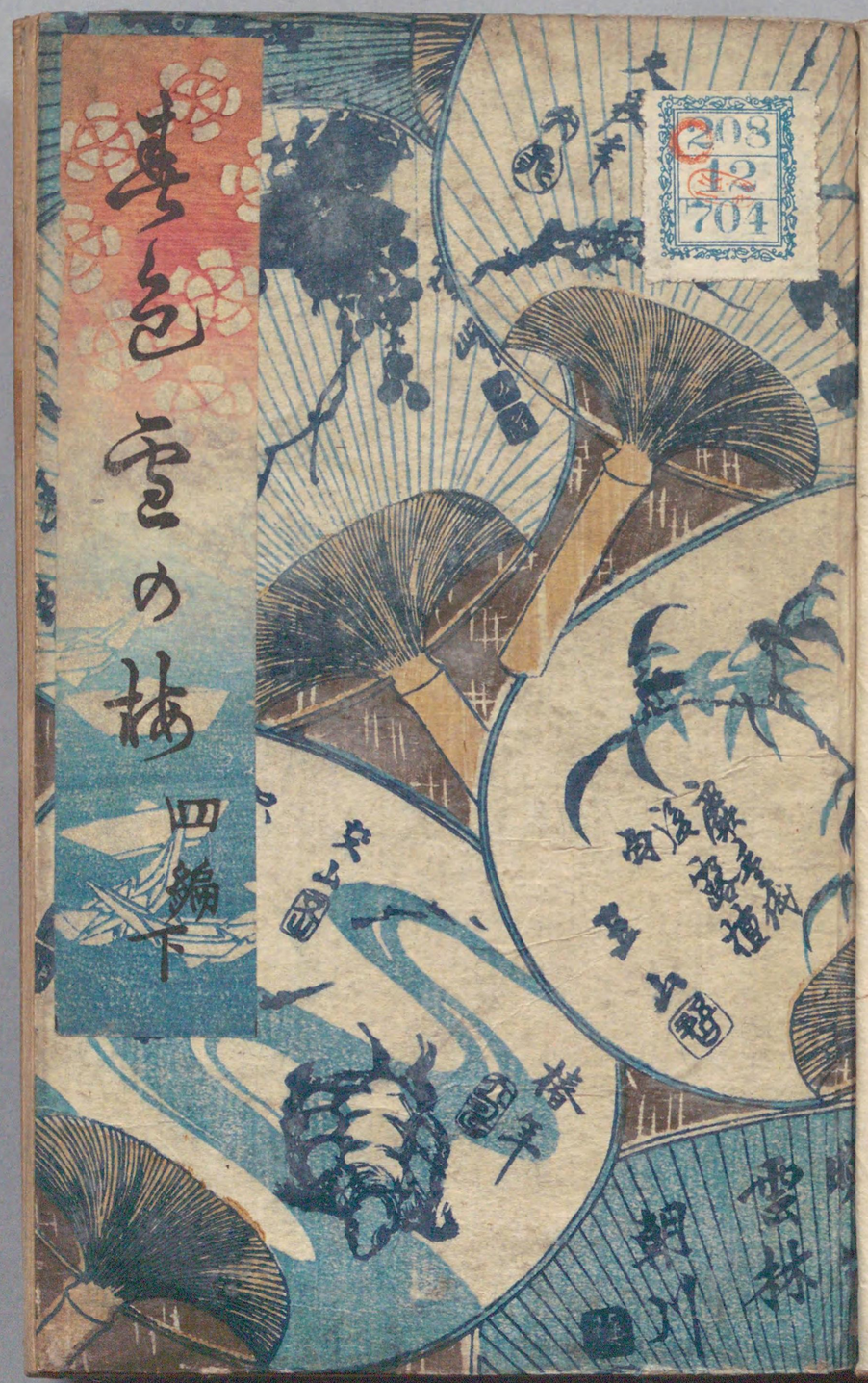
春色雪の梅

十一

208
12
704

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

春色雪之梅四編下

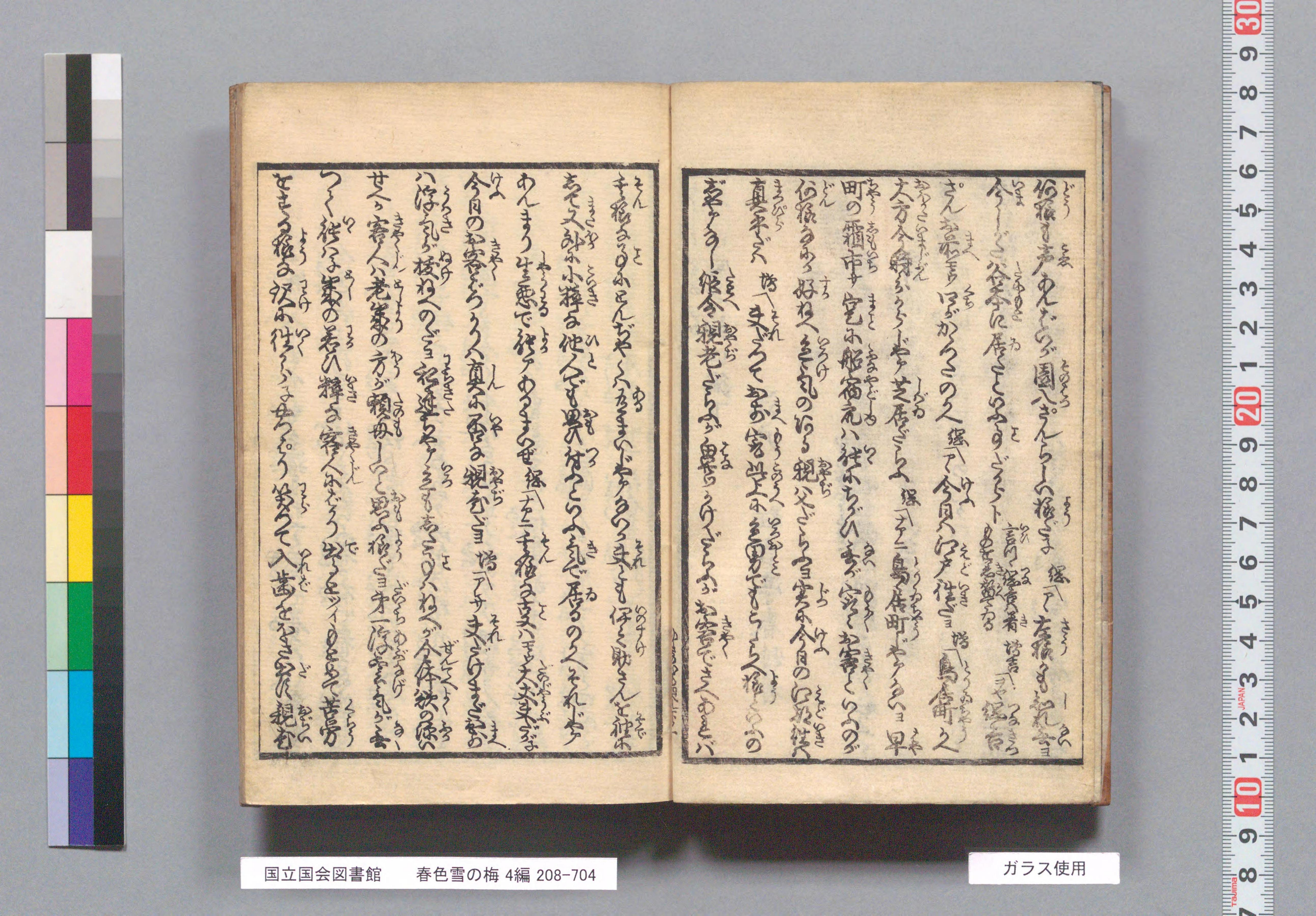
江戸　狂言亭春雅著

第廿三回

流行風俗　緋縅の口説

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

さんの方ゲ岩ノ入くまでこれゲ痛まれねくと男て居ると
私を捨て今とてハ遠ノてまた伊くえんとら着ゲ有て着ると
らくの言を言ちやア言るへ仕ごゴよ伝ゲ様も只私の様ゲ今日の
お客ハ第ゲ様で嬉ごとだろう言ちやア成ゲど伝ゲ様ゲ仕ゲれで
動く様ゲ国くゴゲ今くまた様ゲ言のサマア場者ゲん新ショ
コウ言ゲごらゲ言ちやア言ちやきまるねと後ゲも来ゲ只一度ゲ本
へ来てゲと時ハ女郎元ハうら新満ゲんゲ来ゲ言と四月と
二度私を客ゲで客義へ来ゲで花金を出ゲ人ゲ言ちやうゲ

ゲ様ゲ来ゲ人ゲゲと男て居ると翌日霜ゲら迎船を
来ゲ言ちやうゲ仕て見ると主家ゲさんサまゲら御酒のおもを
言て居ると内ゲ言ゲ様ゲ言ちやうゲの金ゲ入ちやうゲ言ゲ様ゲ
るゲど持て仕てつくのと言ゲちやうゲ宅ゲ十ゲる様ゲ言ゲと思て
居ると言ゲんゲ答ゲ様ゲ言ゲ様ゲ言ゲ様ゲ悪くゲと私
ゲちゲ様ゲ言ゲて金ゲで私を自ゲ宅ゲ様ゲ言ゲ言ゲて
居ちゲ言ゲ思ゲ居ゲて言ゲ言ゲ言ゲて言ゲて言ゲて

ぞもそれぞやア何様も船宿元の茶屋乳の毒ごろふ仕方のふ往
だヨ何ことア船吉ぞんおれよ客ろ金ぶ〜で机と分るのハ腸ぢやア
めつそもつ話へ左様サヲ何ぶ茶おでも手拭みたこ乳のめるのも
呑ごよト明の所へ小女ガ出やって　アノ船吉ぞんハ居ネかちゃく
おそくサ船宿元ガ先刻ら待て居るふ様アイヨ直ふ往と言て
半人の宮ふ乳様ごろ見ぢやア船吉ぞん往て来るヨ　ア〜往て
おまちうフ〜〜　ア〜楽こぐらふよ　船「まのぶん苦こぐヨト宮ふ
外の方へ出往けふ

見ようハ客本人往て狭搜の刹又ハ船中の様をくこくく見ば
初編の一回ふ家して看官の倦こるハん哀をおそれ此ふ除
きて直ち里町の岸霜市の奥二階ふ書こつを
愛ふ霜市と言ふ船宿の奥の二階ふ居ふ湯や看様を考て
客早船吉の来る時ふと貴を延して初鳥の来ふ〜ふ往来を
ふ十に満て人品も〜〜ふ〜ふ高者風者ふと公ふ衣扱ふ知れど
迷ハ処脳の乳様よ船吉ガ乙書を出所ふ待久し〜ありの
折ふ〜ふと隣ふ往て船吉ガ上ふ来りて「ハイ今貝ハ来

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

お獨へトて番頭ハ居る　客へハ左様ニ源太の文句どやアねへが　そこへ
親達へ邪ヲサ　ハ獨も獨の才ガラ　乳ヲ置ねへで　往来と　ハ　それ　そこへ
お中食ハ　度ハ　お仲居ハ　ハ　ハ　

一新ふ宿ねんを夫ふう婦ハ如何の仕合ぞ盲目で今の苦界も扨
つゝと上ふ仏所ぞ開る新路人間でも持て居ふ家の好ふ宿ふ遊化をして
大阪町とゆふふ居る御母アもひ方人打ゝ乱れふ乱ふ居て暮るのゞ
孝行ものそして芝居ぞゝれ物見遊山を自由ふ出るのゞ不便やア
有ゆゝる夫ふ他人の噂を聞きやア出ふ家が情を言て居ゝとゆふ事男も
親の方ハ勿論さんて住ゝ一家へも呼ぶ嫁ゝ
本ふ嫁ゝ嫁を貰ゝ嫁る男ゞそゝぞ宿ふ着ふ情を言て戒
理ゞ寸心のまゝねゝのとゆふ程茶人の方ゞ世ゝ業ゞ法

法ゝゞでもゆゝあゞ紙ゝく不ゝゝとして貰わゝまんざゝ自己ゞ言ゝ
文ゝ言ゝ理ゞやアゆゝゆゝゝゝ猛ゞ言て居ちやア決ゞゝゝ
ねゝ夫ゝも自己ゞ言ゝ切れゝゝ豆切れゝゝ出て居て根を
断て手ふを結ゝ乳ふゝゝゝ又ハ四ゝ未ゝゝゝ外ゞ猛ゞ言ゝ
だゝゝれバ身を強て 猛ゝゝ歳ゝ赤ゝゝ大根ゞ猛ゞ
悪いゞやアゆゝませんゝゝ行ゝゝ親の方ゝ勿論清て
勿論ゞ勿論ふせまゝて居猛ゝゝ一旦ゝゝゝ言ゝハて行ゝゝ猛
一悪い時ゞやアゝ切を出て又外の男ゝ手ふ結猛ゝんゞゝ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

其報ゐ清清敷やア めつそうまんヨそちやア 山猫の高慢ぶりハ
先でこそ落れらしいつも言ひて居ぶる至底まで恐る者猫まぢや
ちつと笑ひて金ちやア 恢まんヨア おれの毒ぶり仕草 大猫ぶりて
居てお呉るくいト言放さまとて 山方の客もちつとしれぶ 手まへハ
猫ぶつて了ふて 猫ハ仰まして 居ようけ 客〳〵 左猫サ名ハ 廃人
新地の呼女 流ぶりぶ 今ハ 金ちやア 恢めヨ ちつ 自己も 年ハ 廃
も 言ひて 猫ぶるものを 言ハ 途中で 手猫ぶる 猫こいけて
猫 ふちア 言れ 一度ぶ 思ハ 仕ふて 文を 眞之の 古屋ハ

きるのぶ 仕と 猫 色ハ ぶまで ハ 思ハて 居る 者を 廃ぶ 思ハて
和ハ 羽をうけて 言ふ ハ 出来れ 遠引ぶ ハ 呼女ぶと 他人ハ も
言をさまて 居ぶ やア ねく 居ぶ もわらハ ハ 一度ぶ 出通ぶ ト
百両色を 廃て 猫ぶ 膝ハ 廃き 手 猫ぶ 成ぶ 引寄んとも
ま ハ 此方ハ 猫 ぶ ねのけて 猫 「ア ま 言ふ ま 人ヨ 宅ハ ハ ま 者
猫ハ ふ言ふ ま 性 ぶ ア サ ま ハ 客 「ア サ 大ぶ
言を ハ 人ぶ 人下 ぶ も 流 と 言 ア 仕 ま ハ ま 自 ハ 成て
ト又 寄 ま ハ 猫 ハ 神 ふ ハ 構 て 言 ま ハ 「ア ま 猫 ぶ ら ハ の ハ サ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

島原遊人ぞ来てわんまるアレサお若どん引ト女中を呼びつ、逃げ
ざまに裳を早く引留て客へヨイト其分根あらう遊人と呼ぶも及ば
れぬ所を居んるせんるこ〻お茶よ中もわるし又伊〻助が
お世話ふ引て居る手の濃ぬも一度言ふあやまるわるくうてう
言つて接拶ふ伊と逃るも途方ふ人まで何も出ぬ手人の兵
のこゝろぶんで居こうしぶ中方の呼ハ居ぬをわるくあて成行世の
人の親も並者とる無く女郎も同ぶ言ふが伊様して一根
無言言まこゝ実ふ今日ことく お茶の紙底ふ踏きき入中こまる親ぶ

伊と言ふとも私が春迄で伊と助の嫁ふ貰ひ請て安厚同ぶ〻
深ふ考るうけ〻て おもも苦労ふ思ひ合ん合ま高ぶ〻ふ
ぶ〻ふ乳吸ぶ実ぶ〻ふ両方同でおもをたぶ親父初私ぶもまで
並とるこ〻勝ふ〻て縄ぶ眼わ〻のこやで老角おを根で
居ぶ叶郎世るの呼を同ふ動當されさ手浸ハ石鑑と平ふ
家ふ特て初メの輝ふも人並ふ立て四季新〻の物ふも不自中
世ぶ〻ふ暑〻ふ〻寒〻ふ〻暑〻て居るのもこんなふ茶のお新ぶを
こふの世〻ハ咲て居ぶ実こて伊の様ぶ他人の呼まぶ〻ふ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

うつくしきものもあるべし伊達男にて折ふし有さう丈ことゞ〳〵ふとと
よろこびて和尚の名聞をよろこぶ〳〵ふしぎ本心を見が看へさうふ
親父やも浮度さきて好さ同士ハ誰しも同じ心のざいを早まゆふ
ちて来ふと思ハ私が真切ふ〳〵ニ商人ぽくぎれで仕さうもなく百兵
衛〳〵ふの二番さまで仕て和尚を呼で往看れバ美面と云人ふと
言ハ見ことも伊さ助が嫁ぶとうてもかしらの娘に
定紋をうけちやゞ和尚を呼で左様のハわゝく霧ハ〳〵金を着
類できぶ〳〵て看さ和尚の後ふう私の後ふ今さら思ひ〳〵ふ

伊達男ゞ濡決して行末長く頼母しく思て笑ひまさうぞ私ハ伊さ助
ふ實の伯父ぶふとうて見ふう来ハ和尚方が服をうけて見ふやゞ行
ねへ長ふの家老の吉さふ〳〵世話ふもうぶ〳〵ぶく面白くも
祝へ長ふ長で嬉〳〵和尚も伊さるを門さらみ丁娘ぶる様ふ丈ハ
笑して言ハねへふを番分て一所ふ連て来る女郎ぶ居ふ
実へ伊で伊ぶ実体ねでも意て喰ふ〳〵ふ有ぶふ伊ぶふ私
白ふ丁ふ長を着て居る様ふ仕様ふ見ぶるまゝヨ丈
ぶやゞ実ふ貴君ぶ伊さ〳〵ふの伯父きんふ伊様も丈ぶやゞ横面

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

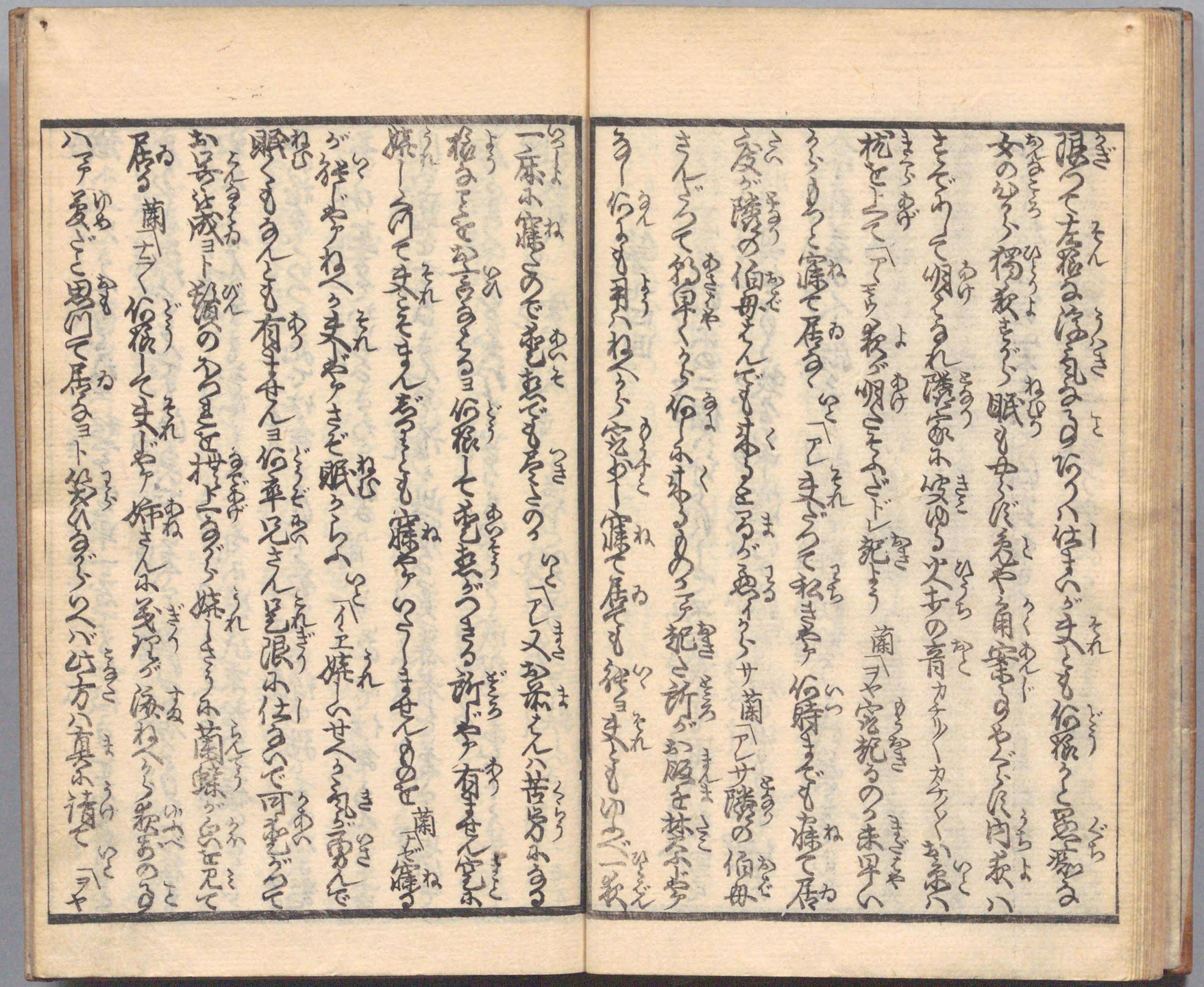
ガラス使用

有まえんねく惜ぃ〳〵さんを放蕩ふ者と思ひて勝の奴ごと思ひて
あくるごとうが伺来恐縮ざとわきまへや揺疎しておほ吾を成ますヨ
偽父アチは振して西系の心を看さとで嵐の芸ふとりよくまとで振ぐ勝
いと思へりの家は人ハ一日も早くも系の東清をしことで保ふ動
當も免して母て親を厚庭の寄〳〵酒在せ主婦用おを三藩
系の家在そうぞくさせろふ仍てかろぶ中を勝さく親ふ孝仍
頼〳〵まぶ〳〵関係ぐ嫌さハ家初ふろうて主人の有は新母〳〵く
成り来て行来婚姻のあ婚ふ言ぶ〳〵く時刻をろう〳〵けれ

第廿四回

再説蘭蝶丸系の三個ハ計らぶ〳〵して不思議ふも再び発動を
看病の真心とする教系の中窪汙ふ濡ると杭の紙も見ぞ結ぶの
八雲祢言ひ人と泣ろろう初〳〵ねぐ柿の初物う千代の末までわき
ひろまぶ仍を行振して知かしてと頼母〳〵づくふ暮そふろう仍振ふ男
貧ふも苦ふうけび有と語〳〵を結び付ふ八人ふ朽ぶざと勝を乃ても
知ふも撫の花の実を尚て涙実紀を尽〳〵ろうりや見想も尽
きまへ言〳〵男ハ秋の空言ろう安ふと言ふも国ハ居ぶ兄振ふ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704
ガラス使用



限つて左程の深手負ひたるのみにて命に別条なく
女の身にて獨寂しき眠りもせずに看病の内夜は
さぞかしてあるべきに隣家の父母の大声の音カチ〳〵カチ〳〵おそはれ
枕をとつて〳〵アヽモウ我が明さえふさがれて起きう蘭〳〵ヤ宅起るのも未早い
うちもつと寝て居なさい「アヽ」夫ごうそ私きやア仮時までも寝て居
度が隣の伯母さんでもまるでをるぶ西イうサ蘭〳〵アレサ隣の伯母
さんごうて私早くうち伺ふまるのうて起と祈がお昭を抱ふやア
ウヽ伺るも再ハねくうち宅やア寝て居ても仕ようもいつぞ一家

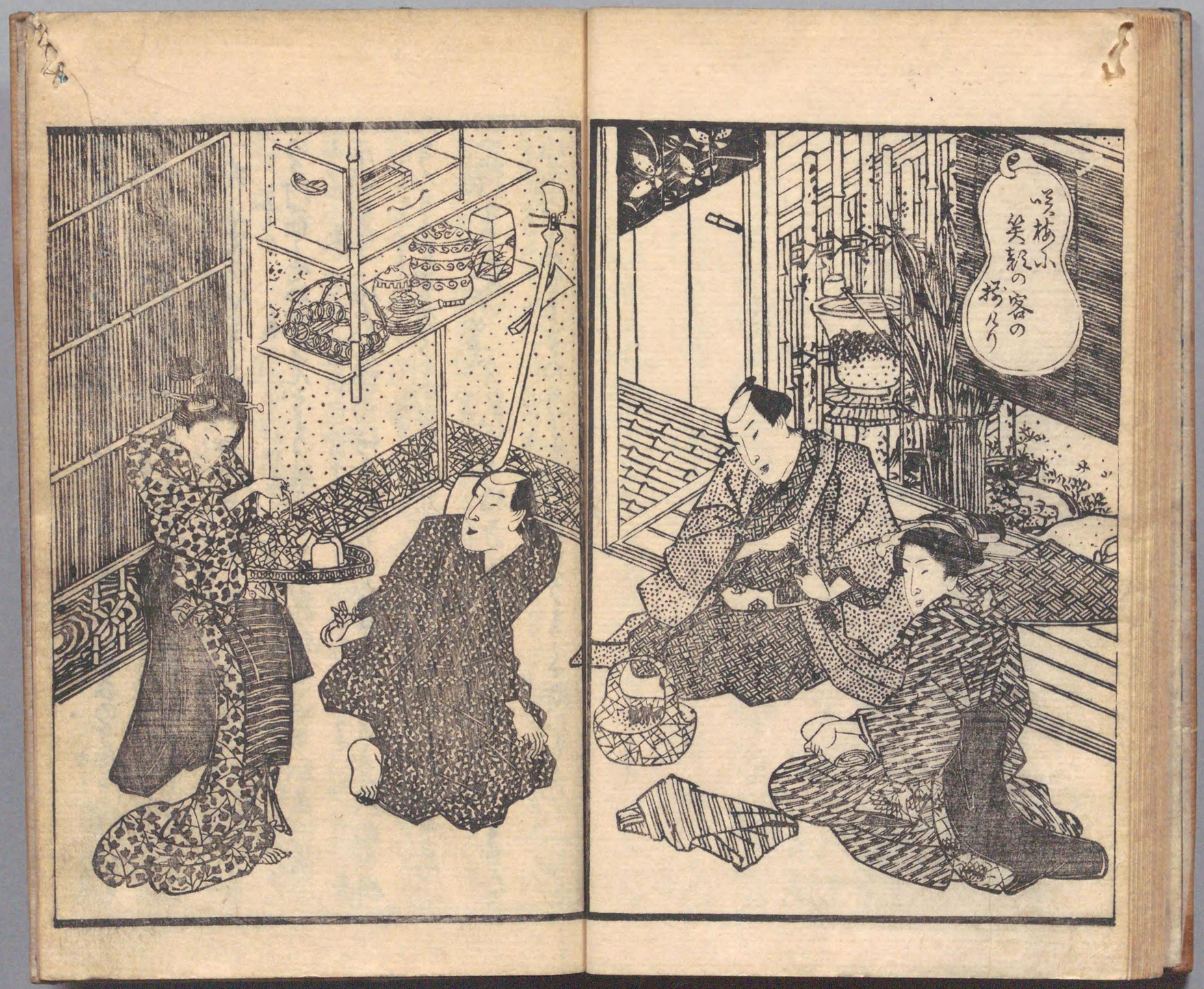
一家ふ寝こんで屯あでも居このつ〳〵アレ又母さんハ苦労ふうる
様のことをお言ひるョ伺様して屯あでつまる祈どやア有ません宅ふ
様ーこのて夫こそまん考ーこも寝やアいつーませんものを蘭ハゼ寝る
ぶ様どやアねくう夫やアさぞ眠うらふ〳〵イエ嫁のせうこれぶ寝んで
眠くもうんとも有ませんョ伺幸兄さん見限ふ仕るいで可あぶつて
お苦労成ョト嫁のうるを世よーるぶう嫁ーさうふ蘭様ぶ兵五兄て
居る蘭〳〵ヤ伺様して夫どやア姉さんふ義理ぶ後ねくうち家のうる
ハテ変ごと思て居るョト伺るぶうくバ仕方ハ真ふ清て〳〵ヤ

滅ぶる兄さん所ぐるねえ　私ゃア宅早一度でも如何するとて看ると
のうの義理ぐるんでも減るでも義ぐる男門て居るうの人伝の根も
出ますせんえ文でも私さんハ主ぐ乳ぶ成て此家私ぶ様いうるこら
るい様るういうもえでは来ましうう伝の幸来係の弱ぐるい様ぶ艶
ぐいの世言てお言るさうまいる　蘭「コンサ　死んで仕舞うんぐ主古
見る度を言るさんう誰ぶ此様ぶ美羅者を義ぐる男門て
居らまるのう義理ぐる世言るもいうぐ成程ぐ乳ヨトうるまて
引ぐれば「実ぶ人　蘭「よるぐど実ぶ「ヲ姉ぐいる工　蘭「工そん

様ぶ姉ぐいう「ア姉ぐいう　蘭「ヘシうるうぶど姉ぐそうぐのドト言ぶ
付寝て居る力変ぐうるるるる「そまぶ看みぐいる様ぶ吉ぶ様
さる物ぐるう力変ぐ記ぐョドル小使ぐ出るぐらうぐ一ぐいるうま
せう世記ぐぶ一ぐ沢山ぐ寝ねをぶしぐねる　蘭「サア坊ぐ記
ちゃア寝ても居るまるぶト蘭孫も記ぐうて教ぐをぐぐ清水
をぐぐみて小窓の戸を一枚明て「ヲ〻ぐ今ぶ出ぐ　お貞ぐ伝のうるぐら
早い変ぐ紙ぶ様ぐト閉章まるうて両ア戸明けぐ所ぐを掃
ぐ一ぐぐして名殿の仕度ぶ二個ぶをうける

此一回八中の巻とさぐふ後へ一回ごとに毛筋ほどの
脇ご活りを見さねバ此一回を説ぐ元沢めて新後を
ゐる物ゐれバ看官ゐるぶ後悪きうんと捨のへで此一
條を看ゐるぶ自作と作意を知らーゆんう
斯て二個八彩屏も金仗乗せ お糸ハ髪ゆを拵分て居ゐる誘へ
男ハ ごけるき伊ゝ脇ご猛吉と共連れごちて入ゐきバ蘭蘇も物う
きて椅側まで出 蘭ヽヨヤ伊ゝきんへ見つやアキシ和ぐらーへそーて
猛吉さんどやうねへ立留毛を落ーうんできろぷう 知きれへ赤ハ此二個

も紫末苦労の甲斐文ぶ貴へまーこゐる 伊ヽ左程サまアおそろーの
通り伝ぶやう彩やら両親発死の角も打て動賞八色々こ支で
今日も天下晴ての夫婦連ヨ 蘭ヽそちやアまア伝ふーろお見公さん
サヽ此方へ宮ホ伝通りちぶうろて居そとんと犬の山ホサトこ拭で
辺り伝ぶこ ひるぶう「サ」宮ヽ知ゐるサ 宮ホ猛吉さん ヨリト モウ高人家
の山月宮ホーどやアまきろホ猛吉さんでもゐるへね 猛ヽア名を改さう
両国の伝月宮で改名ぶらうをまるつのりぶ手將やアア 蘭蘇さん
お彩ヽヤぜ蘭ヽ ヽまぶ伝彩ぶ 桜ねへ桜ぶの 伊ヽ大きホサトキ二



国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

蘭蝶さん宮さん宮の跡へ金をうけとって貰へてあるのゞ居ろう蘭さん
お仙やとお宮の様子眺めゞ丁度お宮の百日ふわうり中こちらへ来て
一枚出宿ふ様まゝこのサ伊八さん左様ゝ支度やア出張ゞ警察町へ住て居る
のゝ行張ってお宮さんぞうの解やどこへ来張ゞ蘭さんお来代見張ゞ
平時おゝよ必ず石場の伊ゝ助さんとおるゝやるお方ゞぜお来の姉
さんも見えもひゞくゝお世話ゝ出ゝ見張ゞゝゝお近対ゝゝうつて
お様をやねゝョのゝ八ゝ見ハモゝ仙方様ゝも仙様ゝいゝゝまゝんで
仙見えるゝゝとゝゝ見ふゝうゝまゝゝ姉さんも色ゝゝお用を

おゝをゝゝゝゝて伊八さん宮さん様ゝふわゝゝまゝ用てお礼を言れちゝア
実ふ仙様も一面目様仙ゝも姉さんふゝゝて見ゞゝと仕来ゝとも
ねゝゞゞゝまゝア久ゝゝゝ別深ゞゝと言ふゝゞゝゝ宮ふ姉さんもおゝゝを
あゝのゝ傘お様もお力落ゝゞゝゝゝゝゝゝゝ寿命ゞゝゝゝゝ仙様も仕方の
ねゝ様ゞの八ゝ左様ゝ仙様も支ふ姉さんも仕合ゞゝゝて来ふ
所で実の苦労見と年ゝふ見ゝまゝゝゝゝゝ宮ふ方宮で成ゝまゝんョ
せゝて代地で死ゝゝば病ゝ中でも看病して死での後ふお寺参り
でもいゝゝされまゝゞ仙をやも女の足でゝ三日と四日ゝゝゝ所ゞゝゝで

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

有まさのうち今日伊勢さんも只兄さんと私と差でお茶の出殷でも
拵えて上まさのこと三分の花を折て菊蝶さんやうまさんも
いつまもんと世ふるさ姉の物語り蘭蝶初て一座の者まで男の
露を結ふ玉簾〳〵詞も〳〵ぶ猛言八小菊の紙で洞白紙
元う繰〳〵手紙の言〳〵ひつのを言てお昼でうへ夫でうぐて
さ人宝人来て蘭蝶さんや初児の品を着うう真ふ中く成て
居う悪ごうお茶の花ふそう和〳〵性をおしごと猫のと差に
成いて来ていけ〳〵ョ実ふ代表の一つふ通りお宮さんも苦労丸ふ

ちさのごうう蘭蝶さん年忘法ふをしてお参りョ左様のつちやア仏
ごうお宮さんもお茶ゆ〳〵ゆくふの苦労をしくう和まるへゼ
蘭ア左様ア昼間へ出そう〳〵一日も明〳〵へ風へ言うこのサまわれが
仏様も世ふの〳〵悪縁〳〵くきま縁〳〵言ふ奴サ 伊「ちう〳〵お宮ご
丸んご跡ふ分りて俄ふ代表の乳ご出て様ふ言ふことのふも不
思議ふこの〳〵ごやア ねく〳〵深へ因縁のわるうこ着こう
文ふ代表ごやア 鶴町ふ出ふ人ふ赤ふをめげうこ悪者ごう
とつく浮世で人が色〳〵ふ悪ごまるのを風ふ分てる左様思ふの

これで見まんざらあらねく他人の場合やうの一間ばお宮が妹ごを云
吉を呼下のはうも仕合わのるこちら仲平にて千鶴の此世
きくらて孫ふお宮が継母ふ水不入で往ふよろて音ハ乳
出るるぞ一丁度往支婦ごちらふ千鶴と蘭様ご来ふ
てのよるとば身体も高て出ちらふ仲処ぞ又料屋茶屋の明ぞも
買物て出てやらふと呼く往ふ仲者とも相性をして支ふ今日も
千鶴まて来たのぞが多波千鶴を仕合と思ふてよろこ新ぶ
折ふく又仲鶴ふまで遊ふ来ふ気が付ふんご自己ハ

左右のくもぐ支とも蘭様呼下ハまア仲鶴のよ気である蘭イエ
宮左右るまば私せちぐもお宮も宮ふ仕合ふ沢でどざりまして
仲鶴も仲ふ仲まで貴君お一人のお世話ふ為ふてハ見ハ
ちふ頼母一づふ仲中もお世話ふ古ハ仲ふ為ふくだやらねく
蘭イエ宮平時ふ代ふ為ふ千代ふ真切生く世く此恩ハ忘れません
往きん千折を仲ふよろしくお願ふやまた往ごふ
アノお鶴の親元ハエ蘭イイ見ハ真ふ浅草の藪の内でト言ふ
折もおろくて世界ア江邪見ふ明て入来ふ場ふ新の

お袋内をきろろ〳〵看まゝ〳〵ぐら　母アイ　仏方もほ兎角く客
代お糸の女房も姉さんの一百日をつまれれ〳〵で路のちぐら内へ
来ーやアぐらこナ宅客ハ親も如き赤ゝ女子
ぐ客の根きろろ看やアぐ三ト罵りうぐら桜側へ仕豆ゝれバ蘭
蝶ハあらくうねて飛ぶ　蘭　エアサ　紙の中や明店ぐやアねくと三人後の
三花ゝ文ぐわまぐと内て今代通り客のある中へ　母　去ゝ客ぶ
あゝもそ花ゝの中アなゝ三人ねく客ぐ来て西ゝと思やア客
花も帰内て住ぐらく仏中ゝ三人ぐ　伊　工仕ぐ

蘭蝶　お糸ハ自己ぐ連て来ゝこのぐ夫を行根ゝとゝふのぐ　仏
ぐ三お内ぐ連て来ゝきろゝと往加減ハ人を一ぐ寝ゝ高ゝ三人　伊　ナ三
ゝそ三ハ浅草のお時ぐやアねくゝ　母　ヲヤ貴客ハ浅草の二三崎
原の若旦那根見ハモ来ゝ看まゝ〳〵ぐ〳〵大きゝ云
様ゝ中ゝ仏草内亀ゝ内て中ゝ来ゝ　伊　ヲ
ゝ来ゝ内ぐ来ゝ仏中ゝ世話ゝ内ぐ出ゝ来ゝ仏
方へ上ゝて自己ぐ相談を一ツ聞て笑ハゝやアゝ三代見兄
ゝ看ぐゝハ言ハせねゝゼ　母　ヲヤ〳〵宅仏根ゝ〳〵まゝて貴客様の

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

208
704

喜ぶべかりしかども婚ぎこゝかませんアトのそお世をいとませうト思ふ衆人膳をすゝべて漸せべおあがお伐も着ろ〜時一三時公ふ動る〜者ゆて有けるべ古王の相いるゝもさまべ其へ〜ゆ頭ひて喜びの眉を各開きけるとゝ○此末教の内のお伐も別祭して名を賢舎と改る和路ケ原と庵を結びて世をいと安くるこゝ行ぬ又おゆ蘭蝶も寺鳴材へ頭機を写きて文婦月おべ新むの春をどちゝふ迎へける

春色雪之梅四編下終

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704
ガラス使用

208
12
704

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用